

二 『同声会会報』その他より

東京音楽学校の思い出

吉田みさを（昭和九年本科器楽部卒業 ピアノ）

小さい時から私は、上野の音楽学校に入りたいと思っていました。先祖の墓地が谷中だったので、家の前から上野または浅草行の市電に乗り、銀座、日本橋、万世橋（広瀬中佐と杉野兵曹長の銅像がありました）を通って上野公園前で下車します。動物園の前を通して左に折れる時、美校の前か音楽の前を行きますが、いろいろな楽器の音のする学校が楽しそうで羨ましく、祖父に盛んにピアノをねだつていた私には憧れの的でした。

入 試

私達の頃、入学試験はまず専門技術と読譜力、聴音力で第一発表がありますが、それが夜なのです。朝、ノコノコ出かけていつて、もし不合格だつたら門から引き返すのが厭なので、皆少し恐いけど暗い上野公園を一人で見に行くのです。友達と行って、もし自分だけ落ちいたらなんて考えると、なるべく人に会わないように、街灯の所は下を向きながら、帰りには大きな顔をして上を向いて……。二次は専門技術だけで発表。次は学科と面接と身体検査、そして合格発表となります。〔中略〕

入学してみて勝手が違うので驚きました。まずクラスの室がなくて女生徒控室に本科も師範科もごちゃまぜ、個人個人で時間割が違うこと、考えればこれは当然の事で各自専門も、師事する先生も違

うからでした。それと女の先生が皆立派な着物、帯付き姿だったことです。学校の先生は袴姿だと思っていたのに、まるで劇場の廊下を歩く女性みたいにハンドバック一つ持つて歩いておられたこと。冬は大島の着物に無地の縫紋の羽織姿でした。

掲示板以外に、ちょっとした事項は各学年の代表（男女一名ずつ）が教務に呼ばれて命ぜられます。代表は学友会の理事も兼ねるのでいろいろ男子と話し合をすることがあるために、狭い理事室でワイワイ話しても咎められませんでした。私は幸か不幸か入学の時「代表を命ず」とやられたので、クラスメートの恋のお使いをよく頼まれました。駅のホームで待っているとか、銀座のどこそこで待ち合わせとか。

授業は、音楽関係を除くと国語、外国語、教育心理学、体操（男子は教練）などでした。

男子の教練は、鉄砲かついで隊列を組み、中佐殿の号令のもとに歩調をとつて校庭内を歩いていました。鉄砲が重いので、すぐその後に楽器を持たなくてはならない時、小指が痛くて困ったそうです。私達は体操です。体操というものは小学校時代から、指先まできっちと伸ばして一拳一投足にも力をこめてするものだと思っていた私は、これまたオドロキでした。女の先生が小さな太鼓をもつて、軽くそれを叩き、そのリズムに合わせて柔軟体操でした。前者はデンマーク式、後者はドイツ式だそうですが（現在ならラジオ体操などです）、そんなだらしない体操は見た事もないでの全然しまらない授業でした。

国語は高野辰之先生と、若いK先生でした。K先生はいつも黒い

背広の色白で神経質そうな小柄な方でした。奥の細道の講義を受けましたが、「ピアノばかり弾いていないで本を読みなさい」と仰云いました。生徒の誰かが「私達は時間の許す限り、楽器の練習をするので本を読む時間はないのです」と反発しました、「眠る時間を割きなさい」と。あまり笑顔を見せない方でしたが、その時推薦された本が河上肇の『第二貧乏物語』でした。そして「今築地小劇場で“吼えろ支那”という芝居をやっているから観て来なさい」と言されました。

憧れの学校に入学し、何もかもが珍しく、体中を耳にして吸収すべくハリキッていた私は、この難しい本を一所懸命に読み、早速はじめて築地小劇場へ行きました。灰色の暗い感じの建物でしたが、入口に巡査が四、五人立っていました。普通の劇場にはない雰囲気でしたが、その前を通る時私は堂々と（なにいばつて立っているのよ偉そうに。資本家の手先のくせに、負けやしないわよ）こんな闘争心がむらむらと湧いて来ました。劇の筋は所謂奴隸として笞打たれながら働かされていた苦力達が、目覚めて一斉に蜂起するというものでした。非情に痛快な思いで帰宅したのですが……のめり込めなかつた私は“赤”はそれでストップ。また怠け学生に戻つてしましました。おかげで卒業出来たのですが、クラスの何人かは停学、退学処分を受け、K先生もいつの間にか退職されました。高野先生から万葉と近松の戯曲の講義を受けましたが、授業中の雑談の中でも恐い所と面白い所がありました。ヒチコックのような体躬、ただし顔は四角、口髭のある赤ら顔で分厚い眼鏡をかけた自信家でした。その雑談録。

「僕はよく勉強をする。毎朝四時に起きてナ、家族の迷惑にならないよう雨戸をそつとあけるんじや。音をたてんように。」

「僕は何をやつてもメシの食える人間じや。習字の教師でも新聞記者でも何でもござれだ」

「僕は現在帝国大学（現東大）と大正大学に行つとる。こんな学校には来んでもいいんだが、とにかく此処は若い男と女が並んどるからナ、眺めはいいよ」

文部省唱歌が必要になった時、先生は本当にお忙しかったと思します。枚挙に暇なく作詞をなさつたと思うのですが、わざと避けられたのかあまり七五調がないのです。現在でも名曲と謳われている

“故郷＝兎追いしかの山、小鮎釣りしかの山……六四調”

“春の小川＝春の小川はさらさら流る、岸のすみれやれんげの花に……七七調”

“朧月夜＝菜の花畠にいり日薄れ、見渡す山の端かすみふかし……八六調”
“村の鍛冶屋＝暫時もやまずに槌うつ響、飛び散る火の花走る湯玉……八七、八六調”
などなど

少しはんぱな字数でまとめておられます。

先生は斑山と号されました。斑なんてあまり綺麗なイメージではない字をどうして使われたのかしらと思つていましたら、御郷里が長野県の斑尾山の麓だったからだと思いました。いつもや偶然娘共と斑尾に遊んだ時、御生家をお訪ねしてみました。甥御様がおられて、先生直筆の原稿や、皇后に御進講なさつた折の感激を詠まれた

短歌が、素晴らしい色紙になつていました。署名簿を出されたので拝見しましたら、二、三の音校卒業生の名がありました。

これら名曲を作られたのは、明治三十三年に学校を出られた岡野貞一先生でした。私達の頃はもう技術面でなく教務の方においてでしたが、ロマンスグレーの髪に口髭を貯えたおとなしい方でした。

とにかく高野先生の学校に於ける権力は絶大だったとみえます。乗杉先生の時代に管楽科と邦楽科が出来ました。長唄の吉住小三郎、稀音家六四郎さん、お琴は生田流の宮城道雄さんの印象が強く残っています。奏楽堂での長唄演奏会も珍しい光景でしたが、フランスの美しい女流バイオリニスト『ルネ・シュメエ』さんと、宮城さんのコンビで「春の海」は非常に素晴らしいし、音ばかりではなく、全く絵を見るような、たつた一度だけの幻でした。お能を、文楽の人形使いの舞台裏なども説明付きで見ることが出来ました。

綺麗になつた学校へ、校長はしばしば雲の上の人をお招きしました。まだお小さかつた照宮様もいらつしやいましたが、大正天皇や貞明皇后の時と、現皇太后良子様が皇后であられた時が印象的でした。職員生徒一同が門の両側に並んでお出迎えしましたが、お通りの自動車の玉砂利を見るだけの最敬礼ですからお顔は見られません。しかし私共はコーラスガールです。ステージに立てば、真正面からジロジロ見られます。皇太后は黒のロングドレスに黒の帽子、大勢の女官の方も皆ロング、現在では珍しくないロングも当時は一般人は着ませんから、これが雲の上の人かと思いましたけれど、そのお化粧の濃いのに驚きました。全くの白塗りです。歌舞伎の女形のお化粧、遠く離れているのに頬紅も口紅も真赤なのがよく見えま

す。あのままもし外を歩いたら……メンバーやの中にお一人和服（白髪のオスベラカシ）のお年寄りがおられました。誹の袴に紫に金の縫取模様の上衣でした。誰かが言つてました。の方は大正天皇の御生母の柳原権典侍よと。

楽しい思い出に演奏旅行がありました。地方都市から招かれての演奏会です。東京育ちの私でも混声合唱なんて聴いたことのなかつた時代ですから大歓迎を受けました。大相撲の巡業ほど大規模ではありませんが、目的地が大阪だとすると、途中静岡とか浜松とかに寄りながら行きます。これは学校内の、学友会としての行事ですから、生徒だけのオーケストラ、若手の先生のソロ・コーラスです。曲目も一般向けで、シユーマンの「流浪の民」など、ドイツ語歌詞にして、少しテンポをあげると大変な拍手です。会場は勿論、ホールなどないので学校の講堂または芝居小屋のこともありました。

演奏が終了すると全ての自由行動です。同じ土地なら次の演奏開始時間までに会場に入ればよいので、買物でも見物でも。

これら地方演奏旅行の時、また、年に二、三回行われる学友会演奏会の時の指揮者は、山田耕筰氏と同級であられた大塚淳先生でした。元気のいい明るい先生で、かの有名な慶應の応援歌「若き血に燃ゆるもの」の作曲者でした。

年二回夏冬に行われる学校の演奏会は日比谷公会堂でした。指揮はラウトルップ先生でした。スタイルのいい背丈の高い上品な先生で、予科ではじめてコーラスを習つた時、授業は全部英語でしたが、単なる拍子取りのような棒と違つて、こんなにまで指揮者によつて一所懸命に歌えるものかと感激しました。

本科一年の時、ラウトルップさんのが後任として、クラウス・ブリングスハイム先生が来日されました。マーラーの直弟子でドイツ語しか話されません。ラウトルップさんは英語でしたので私にも少しは解りましたが、ドイツ語でペラペラやられるので皆全くお手あげです。コールユーブンゲンの授業の時、結局皆顔を見合させてニヤニヤするだけの数分が続きました。先生は黒板に目を書かれて「これは何だ」と言されました。皆で「ト音記号」と答えました。先生は目をパチクリ、そして「これは『G鍵』だ」と。次に井、これを私達は「シャープ」と答えましたが先生には通じませんでした。先生は『十字』と言されました。シャープは英語だったのです。そしていろいろトンチンカンながらに私達が考えさせられた事は、音楽に関しての用語は、日本語、英語、ラテン語等、全然統一のないものだった事、また何より固定doというものを教えていただけた事でした。先生は単発の音は絶対音で声を出されますが、メロディーになると調子外れでした。なんと不思議な現象なんでしょう。今までも判りません。

半年程前、机の抽出しを整理してしまったら、奥の方から皺だらけの印刷物があるのでひろげてみましたら、昭和八年の学内演奏会のプログラムで、私がシユーマンの「アベックバリエーション」を弾いた時のものでした。私は嬉しくなつて早速当日一緒に出ているメンバーや同級生にコピーして送つたら皆非常に喜んでくれました。折柄遊びに来た長女に見せましたら、目を丸くして驚き、「来年卒業するというのに、こんな曲を弾いたの?」と申しますので返事をしましたら「こんな曲、今私は中学生に弾かせているのよ」

と。考えてみると、私が受験前に弾いたベートーヴェンのソナタ八番は、私の先生がドイツ留学から帰られて第一回リサイタルに弾かれたということです。

近頃よくテレビで小学生のオリジナルコンサートがあり、世界のあちこちのコンクールで日本人が入賞しています。それらを聞く度に、本当に私達昭和の初めは黎明の時代、だった事をつくづく感じます。そして、あの小さい子供達が近い将来、二十一世紀にどんな大輪の花になつてくれるのかしらと、まだ見ぬ夢、見られない夢を心に描きながらこの稿を了えることにします。

(『同声会会報』第三四二号 平成六年十二月 一六〇一九頁)

山田一雄（昭和六年入学 器楽部）
プリングスハイム先生とマーラー

昭和七年二月、東京音楽学校の奏楽堂で日本初演されたマーラーの「第五交響曲」を聴いたわたしは、その音楽のもつ豊饒かつ宇宙的なサウンドに圧倒され、ふるえがくるほどに深い感銘を受けた。第一楽章の冒頭で奏でられる、ソロ・トランペットによる莊厳な葬送行進曲。と、突如、その葬列をかき乱すかのように陽気でにぎやかな曲があらわれ、情熱的で荒々しいクライマックスの後に、再び美しい旋律へと転換してゆく。そして、打楽器の活躍。聴かせどころたっぷりの曲想。崇高さと世俗さとがからみ合い、奇妙な対照を見せながら、あらゆるもののみ込んで、見事に統一されたマーラーの曲に、そのころのわたしは身動きもできないほどに、打ちのめされた。

このマーラーの『第五』初演の指揮は、その前年に東京音楽学校に教師として迎えられたクラウス・プリンスハイム先生であった。

マーラーの曲は、すべてオーケストラ編成が膨大なため、今日でも、上演のたびごとに大勢のエキストラ・メンバーが駆り集められている。その大曲を、今から五十年以上も前の、「洋楽」がやつと黎明期を迎えたばかりの日本で、プリンスハイム先生は、勇躍上演に踏みきられたのである。

若き日に、マーラーのもとでウィーン宮廷歌劇場の副指揮者を務め、作曲家や理論家としても活躍されていた先生は、来日当時四八歳。音楽家として脂の乗り切った年代だったとはいえ、現在とは比べものにならないほど貧弱だった東京音楽学校オーケストラの学生を励まし統率して、『第五』を初演された時の情熱たるや、大変なものだったに相違ない。当時、音楽学校には、毎週、海軍軍楽隊が弦楽器を習いに来ていたが、このもともと「管楽器」につよい軍楽隊を学生オケにフルに導入して、マーラーの大曲に敢然と挑まれたのである。

余談になるが、先生の父君は「プリングスハイムの定理」で世界的に著名な数学者であり、先生と二卵性双生児のカテリーナさんは、文豪トーマス・マン夫人であられた。

この偉大な師・プリンスハイム先生から、わたしが受けた影響は、計り知れないほど大きい。

二年生の時から卒業までの三年間、わたしは毎週一回、東京・麻布の先生のお宅へ伺い、作曲と音楽理論を、一对一でみつちり学んだ。その内容は、それまでわたしが知っていたバッハやベートーヴ

エン、モーツアルトらに代表される、いわゆる“クラシック”とは異なる曲の体系だった。

その源において、「単音」から発生した音楽は、やがて「ハーモニー」へ移行し、十九世紀末にロマン的・絢爛、そして最高に複雑極まるものになった。わたしは、その「複雑の極めつけ」をプリンスハイム先生から習つたのである。

信念の人でもあつた先生は、教え込もうと思つたことであれば、高度な内容でも手加減を加えなかつた。帰りがけには、課題もどつさり出された。当時、先生のもとへは、大勢の学生や音楽学校出身の社会人が通つていたが、厳しい先生の授業にサジを投げてあきらめた人も、少なくなかつたようだ。

しかし、わたしは、先生のお宅へ伺う日が待ち遠しいほどだつた。わたしは型にはまつた秀才ではなかつたが、こと音楽に関しては夢中で、周りの人たちより進んだことを、どんどんやつていた。それに、入学前には、作曲の本や理論書、オーケストレーションの本、伝記、さまざまな楽器の非常に複雑な指づかいを解説した本などを、手当たり次第に読破していた。理論書に載つている、膨大な量の、かなり難解な例題もすべてこなしていたが、入学後、受け持つの若い先生に提出したところ、解答を返してもらえなかつたこともある。若い先生には、どうにも手に負えなかつたらしい。

このため、授業そのものに多少の物足りなさを感じていたわたしにとつて、プリンスハイム先生の個人授業は、すばらしく刺激的であつた。また、先生から直接習う、マーラーの曲にみられるような豊かな音たちが自由奔放に飛び交う音楽は、わたしの気質とピタ

り一致するものがあつた。

乾いたスponジが、グーンと水を吸い上げるように、わたしは、プリンスハイム先生から絶大な影響を受けた。多感な青春時代に大きな影響を受けたものは、その人間の人生すべてを支配する——、と言つて過言ではないほどに、わたしはプリンスハイム先生に傾倒し、先生を通じて呈示される音楽の醍醐味に、改めて開眼される思いがしていた。

印象深い信時先生

芸術家になりたい——。

音楽学校を卒業するにあたつて、進路希望を提出する時、わたし

は、こんな『夢みがちな少年』のようなことを書いた。
そのころの音楽市場は非常に狭く、東京音楽学校、通称「上野」の出身者の多くは、学校の先生になるのが通例だつた。だから、こんな雲をつかむような進路希望を書いたわたしなどは、はたから見れば、世間知らずのボンボンが何やらわけのわからぬ念佛を唱えているように聞こえたに違ひない。一笑に付されてチヨン！ も当然という時代だつた。しかし、わたしはまじめそのものに、そう願つていた。

そして、「芸術家である前に、人間でありたい」とも、強く感じていた。芸術家とか音楽家といつたお定まりのワクの中で行動するのではなくて、「人間」であるわたしは、もつともっと自由に行動できるはず——。体は小さいけれど、心に大きな翼をもつて、それを自由に広げて飛翔してみたいと、いつも願つていた。

ただし、現在も痛感していることだが、こうした望みを全うしていくには、心が躍るほどの喜びもあれば、その裏に、しつべ返しのようなひどい苦しみもある。楽しさと苦しさが、双生児のように寄り添つてついて回るのが、わたしの人生のさだめらしい。

音楽学校を卒業したわたしは、そのまま研究科に進んで三年間学び、さらにプラス一年ほど、合計八、九年間、籍をおいた。また当時、東京音楽学校では、四年制の学年をそれぞれ「予科」「一年」「二年」「三年」としていたが、この稿では今風に一・二・三・四年として話を進めてきたことを、お断りしておきたい。

この、八、九年間の音楽学校時代には、いろいろな活動をし、すばらしい先生にも出会つた。

なかでも、『海行かば』の作曲者として知られる信時潔先生は、とても印象深い先生だつた。若き日に、ドイツに留学された先生の作曲法は、当時の音楽学校のほとんどすべての先生がそうであるように、古いドイツのシステムで凝り固まつてゐる。にもかかわらず、信時先生ただ一人が、「これから音楽」というものに深い理解を示されていたのである。

わたしにも、当時主流を占めていた“ドイツ的古さ”が根底にあるのは否めないだろう。が、それに終始せずに、さらに新しい感覚で作曲を試みていた。そして、信時先生を大変尊敬していたわたしは、作曲のレッスンのたびに、当時とすれば前衛風の自作の曲を見ていた。すると、先生は、

「わかります……、わかります」
とだけ、大きくなずかれる。が、手直しはされない。されない

けれども、この「新しい音楽」を認めてくださるのだ。

こうした場合、自信がなくても、教師としての権威を発して、変に手を入れる先生も多い。しかし、信時先生は、もつと柔軟な広い考え方をもたれていた。『海行かば』のほかにも、カンタータ『海道東征』やピアノ曲『木の葉集』、合唱曲『東北民謡集』、独唱曲『沙羅』など、数多くの作品を残しているが、その作風は、先生の人柄そのもののように、飾り気のない一徹さで貫かれている。

このようにご自身のフィールドで、オリジナリティあふれる仕事をされた半面、新しいものに対しても、大変な勉強家でおられたことはいうまでもない。研究科時代のわたしが、ピアニストとして当時の前衛作曲家・ヒンデミットやバルトークらを弾いた演奏会などでも、先生が講演を引き受けてくださったこともあった。

「なんだ。今どきの若いモンは。変な音楽をやって！」

といった教師陣が多い中で、信時先生だけは、若者の活動の場に、自ら足を運ばれる。青年の中にただ一人、かなりの年配の信時先生が交じって、熱いまなざしを若者たちの舞台に向けておられる姿を、よくお見かけしたものである。

(山田一雄「音百態」音楽之友社 平成四年十二月 101~103頁)

隼寿児追憶の雑詠

寺本節生（昭和十年 甲種師範科入学）

青少年時代

小学校 ピアノ備はず 農村の 長子と生れど 楽に憧がる
中之島 公会堂の 入口に 東音大音楽会の 立看板あり（中学五

上野音楽入学
上野入学 解りレは 独唱マリアートル 美しきエレンは 増永丈夫等なりき
初任地は 県立岡山 一・二中 薫葺屋根の 下宿屋に住む（隣の部屋に娘三人）
十一時 いねんとすれど 旧制の 六高生は ストーム始む（第六高校生学生寮近し）
部屋にて 特大スパイク シューズ見ぬ 人見絹枝の 遺品なりけり（新記録多數作る）
療養の 愛生園の 人々に 合唱慰問 岡山医大生と（医科大合唱部指導）
岡山市 さらばの時は モーニング 二等に乗車 見送り受けぬ（殆三党車）

応召
村人の 見知らぬ人に 付き添はれ 入隊なしぬ 加古川聯隊（高射砲 兵庫県）

点呼終へ 我等の兵舎 倉庫柵 頭つかへぬ坐りて居ても

年時・演奏旅行大阪）

受けは 人無く二階に 立ち入れば ソプラノ大声 打ち驚きぬ
(生演奏初めて聴く)

終曲は ソプラノ・バリトン独唱・コーラスと オーケストラの劇音楽なりき

パラバラ米の 船内食を 嘔吐すは 玄界難を 航行すならん

南下する 五月の海は エメラルド 瞳凝らせば ゆたなるうねり
実戦に 落下傘部隊 初降下 パレンバンなり 油得る為 (スマト
ラ島)

油タンク 爆破の敵機 約百機 編隊なして 姿現はる

終戦

着港は シンガポール 着きたる日 終戦紹書 我等は聴きぬ (英
軍用映画館にて)

敗戦後 部隊移動 度々さざる 我等に対する 報復ならん (英軍
捕虜処遇に対し)

帰国船 何時の日来るや あてどなし 飢餓との戦 始まりにけり
唯一人 孤島の原に 仰臥なし 「兎追いし」歌ふ つぶやく如く
小船より 繩梯子にて 乗りたるは 故国に向ふ リバティ船なり

(アメリカ船)

夜毎見し 南十字星よ いざさらば 北航の船 台湾過ぎぬ
着港は 名古屋市なり 列車は着きぬ 大阪駅に

乗り慣れし 電車は走る 故郷へ 鉄路のリズム 隙り来ぬ (昭和
二十一年五月生家に)

復職

復職は 県立第三 神戸高女 胸部疾患 休職なし (土井たか子)

第一回卒業生) [中略]

お見舞に 秩父宮妃 来給ひぬ 車寄せに迎ふ 代表として

[中略]

枕頭の 書見器仰ぎ 療養し 谷崎源氏 読み終へにけり [中略]

混合

甲師三年時 ベートーヴェンの 胸像の 肩に花環を 合唱捧ぐ
(除幕式澤崎教授指揮) [中略]

音楽室 練習不足の 授業なし 苦しみおれば 夢にてありき
良き歌曲 見出せし時 学舎で 教へたき心 ふつと湧き出づ

[後略]

〔同声会会報〕第三四二号 平成六年十二月 一二一～一三頁

迷路遍歴

作曲家 森脇憲三 (昭和十三年甲種師範科入学)

小学校訓導

昔は、小学校の先生は教諭ではなく訓導と言った。

昭和十一年、広島師範を卒業、四月から務めた短期現役兵を八月
三十一日に除隊すると、翌九月一日には広島市立口斐小学校訓導になつた。

職員室で諸先生にあいさつしたあと、子供たちを講堂に集めて新任者の紹介があった。私は五年生の男子組の学級担任で、四十人の子供の責任者になつた。あいさつで何を言つたか覚えていないが、

こう言まぐるしくては、ろくなあいさつはしなかつたであろう。

各学校で職場のムードは違つていて、校長や教頭の方針、それを受け止める先生方によって変わるものらしい。この口斐小学校では

「若い教師は勉強しろ。そのためには協力する」というムードがあふれていた。

私が東京音楽学校受験を希望していることがどこからか漏れていたらしく、特に教頭からハッパをかけられた。

翌年の三月に受験する準備をしていたのだが、二月に広島師範での恩師太田司朗先生の弟子の会で、ピアノを弾く、歌う、指揮棒を振る、の活躍をし、終わりのパーティーが三次会までになり、翌日から血便。擬似赤痢で隔離され、そこで受験日が過ぎてしまった。

校長は、私を一年生の担任にした。一年生はベテラン教師が担当するのが常識だから慌てた。音楽ができるからということもあったろうが、本当の理由は、別だったのだろう。一年生なら一学期間は午前中で子供は帰る。私が受験できなかつたことを残念がつた校長が「しっかり勉強しろ」と配慮してくれたのだ。感謝した。

一年生を教えるのは難しい。怖い。こちらが静かに頭を下げると子供も静かに…。パツと立ち上がるときこうも一同パツ。美しくも清潔な白紙のようなこの子供たちを汚しては相すまぬ。頼りないと思つた父母もいるだろうが、一生懸命みなさんのお子のために尽くします、と心に誓つた。

授業を始めてものの十分もすると「先生、オシッコー」。行つてこいと言うと、半分以上いなくなる。「今してきたばかりだから駄目だ」と言うと、ジャーと流すのがいる。すばしこい子ものろいのも、覚えの早いのも遅いのも、いろいろいる。

みんな同じ人間だ。自信を持たせようと思つた。選手をつくつた。正しい読み方の選手。字のうまい選手。算数のできる選手。走

る選手。なにもできないが石拾いの選手。一人何かの選手にする。自分から名乗り出で、一人で十いくつもの選手になつた子供もいた。

この一年生が二年生になるとき、私は東京音楽学校に去つた。勤めていた学校から下宿に手紙がきた。「センセアイタ。ボクゲンキ」。あて先が書いてないので、己斐小尋常一年の彼の名前から学校に送られ、学校が私に転送してくれたのだった。

上野入試

国立の音楽学校は上野に一つしかない。だから昭和十三年に私が入学した東京音楽学校は「上野」で通用していた。上野の入試は厳しいものだつた。学科ごとに振り落としていくのだ。

最初は声楽（コーリューブンダンと小学唱歌集の歌曲）。試験のとき、自分の声域に合わせて、音を上げたり下げたりしてもらうのだが、私はテノールでもハイテナーなので、完全四度上げてもらつた。

一部屋に一人ずつ入り、一人が歌い終わると次の受験生が入り、待つていたのが歌う形。私の前の受験生が短三度下げて歌つたので、伴奏の先生は私のときは少々あわてていた。一日目はそれだけで終わり。翌日の朝発表。名前が張り出してない者は、その場からすぐすゞ帰る。

合格したらすぐさま二日目のピアノの試験が始まる。自由曲だけだから、あがりさえしなければ、日ごろのままに弾いていればいいようなものだが、それが、おおいにあがるのだ。

私の前の受験生は、楽譜を上下逆さまに置いて、それを見てちゃんと弾いているのだから驚いた。あわてたときのためにそんな練習をしていたのかと思った。ところが、そばに付いていた先生が、途中で正しく直してやられたら、とたんにあがつて、シドロモドロになってしまった。

あがらないためには、自信ができるまで練習せよと言うが、練習のときの自信とは関係ないらしい。歌のときの私は、歌い出しと、途中歌い直した部分しか楽譜を見た記憶がなかつた。どうなつていたのだろう。

三日目の朝、名前が張り出された者だけが、楽典と聴音書き取りの試験を受ける。審査する先生は、受験生が毎日減っていくのだから樂だろうが、こちらは連日ヒヤヒヤである。四日目も名前が出ている者だけが受験場に入つて英、国、社の学科試験。中一日おいて、最後の、本当の合格発表だ。

どの学科が悪くて落ちたかが分かる発表方法だから受験者には親切だ。でも、毎朝の悲喜劇を見ると、もし友達と一緒に受験した場合、ひどい仕打ちにも思える。最後の発表で合格し、私は飲みまくつた。二日酔いをした。

例年、男七、八人、女二十一、三人合格だったそうだが、昭和十三年春のわれわれのクラスは、男女半々の五十人が合格した。だからお前も合格できたのだと言われると、そうかもしれない。

だが、男が少ないと混声合唱のバランスがとれないこともあります。地方に散つてゆく男性こそ地方への貢献度が高いことに文部省が気がついたのもしそれない。さらに、軍部の動きを見て、戦場に

行く運命の男性を確保しておかねばと思つたのかもしねれない。
昭和十六年三月卒の私のクラスには、前後に例がないほど、優秀な学生が多かつたことは事実である。

一年休学したい

上野（東京音楽学校）時代、月に五十円の仕送りをしてもらつた。卒業時には六十円になつていて、サラリーマンの初任給が五十円。たばこ八銭、食堂の朝食十五銭の時代である。

親父は体をこわして陸軍大尉で軍隊をやめ、一般の会社のサラリーマンになつていた。小金をためていたらしく先物取引に引っ掛け大損。さらに悪いことに友人の連帯保証人になり、その友人が雲隠れしたため、家が差し押さえをくつた。そんな苦しい中で、よくそんなに送つてくれたものだ。

仕送りのほかに学校からもらう奨学資金が八円。これは年ごとに十円、十二円と額が増えた。阿佐ヶ谷に住んでいた親父の友人が時々、十円くれる。私の生活は樂々だ。音楽会に行けるし本も買える。酒も時々は飲めた。だが、楽しんでばかりはいられない。

上野に入学はしたもの、私の教養はお粗末なものだつた。すでに教員生活を一年半やつてはいたものの、受験勉強ばかりで、映画も見ていない。

人生最後の学校だ。卒業して地方に行けば、それなりの専門家と見られよう。学生から身の上相談を受けることもあろう。自分の一番の欠点は、本を読んでいないことだ。歌やピアノの練習は午後十時で打ち切り、あとはできるだけ本を読もうと決めた。神田の古本

屋街でも随分買い、毎日、午前二時までは読んだ。

友人たちはレコードもたくさん聞いているらしく、会話のなかに指揮者やピアニスト、バイオリニスト、声楽家の名前がポンポン出てくる。自分なりの批判も持っている。初めて聞くことばかりだ。私は、演奏家の名前も音楽も知らないのだ。音楽の幅も文学の幅も、人間としての幅もない。これでいいのかと、落ち込む日々が続いた。

一年間休学して自分の土台を作ろうと考え、ピアノの恩師で、上野では一番若い永井進先生に相談した。

永井先生は神経質で、一時間目に気にくわぬことがあると、その日一日中の指導は荒れた。怖い先生だったが、意を決して自宅に伺つた。結婚間もない若い奥様から酒を勧められながら、先生と三人で三時間も語り合つた。

先生自身はピアノで上野の三羽ガラス（永井進、豊増昇、水谷達夫）と騒がれることの苦しさと勉強への悩みをしみじみ語られ「音楽も人間も一生の勉強だ。成績も良いのだし、君も僕も勉強しよう」と励ましてくださつた。

休学は思いどまつたのだが、自分の貧弱さを事ごとに知らされる日が続いた。

声楽では福岡出身の名バリトン歌手、伊藤武雄先生の上海事変で手首をなくされた右手や右肩をもみながら、手が不自由なことの苦しさを伺つた。
人それぞれに、それぞれの苦しさや悩みがあることを知つた。私が二年生のときだつた。

上野の恩師

音楽では、指導を受ける先生の良しあしによって、音楽的力の高さが決まる場合が多い。

リサイタルのプログラムの経歴には師の名前がずらりと並んでいる。演奏会の前に一、二度レッスンを受けただけなのに“師”にしてしまう人もいる。これはやめた方がいい。演奏技術の低さを師の名前で助けてもらおうという魂胆が見え見えだからだ。一年以上接してないと、先生の音楽を感じ、学び取れるものではないのだ。

上野の師範科は演奏家養成が主ではなく、生徒・学生を指導する教師養成が目的だから、入試のときから卒業まで、声楽、ピアノ、作曲理論、それにいづれかの楽器が均等に重視される。それだけ、多くの優れた先生から貴重なレッスンを受けることができる。

入試前の一、二カ月は声楽をテノールの木下保、ピアノは貫名美名彦の両先生のレッスンを受けた。学校では、声楽はバリトンの伊藤武雄、ピアノ永井進、作曲下総院一、指揮法橋本国彦の諸先生。卒業してからは作曲法橋本国彦、管弦楽法長谷川良夫両先生。

みんな、その分野では日本一流。上野に入れなかつたら、私など一生お習いする機会はない存在である。良い先生に付けたと感謝している。

先生方には、それぞれ考え方には違つた。

三年間の間に基本をたたき込む人。幅広く教材を選んで、それぞれの道の広いことを分からせようとする人。教師にするのだから、生徒の力を伸ばす能力を着けさせようとするとする人……。それぞれの特色

を学ぶことができた。

また、こちらは三人ぐらいでレッスンを受けるのだから、三人分の指導法に接することができる。自分が受けるレッスンより、他の二人が受けているレッスンを注目しているほうが、冷静に、批判的に聞けて、収穫が多かつた。

管弦楽法の長谷川先生には専門はもちろん、のちに福岡教育大学音楽科の教官探しでも度々お世話になった。先生の紹介で採用したものは多い。

卒業後、作品を持つて行き、作曲の指導を受けたのが橋本先生。

読者も、橋本先生の「お菓子と娘」などを聴けば、日本の歌曲、合唱曲の素晴らしさが納得できようし、オーケストラの曲も洗練されていて魅力的だ。ドイツ音楽主流の中で一人フランス風で、指揮される際の曲のまとめかたの素晴らしさに、みんなうなつたものだ。

惜しいことだつた。戦後間もなく、胃がんで亡くなられた。臨終の席にいた福岡出身で橋本門下の作曲家・指揮者の平井哲三郎君の口から先生の遺言をいただいた。「森脇君の日本的な旋律には魅力がある。良い曲をたくさん残してくれ」

NHK放送合唱団の練習中のことだつた。団員たちは、一齊に私に拍手をしてくれた。

上野をつぶせ

上野（東京音楽学校）をつぶせという乱暴な考へが陸軍から出た。昭和十五年秋、皇紀二六〇〇年の式典が皇居前広場で行われたあとのことだつた。

この戦時下、のんびり歌など歌つたりピアノ、バイオリンを弾いているときではない。たとえ国立であろうと、東京音楽学校などいられぬ、国民の士氣を弱めるだけだ。つぶしてしまえ、というわけだ。私は校長室に呼び出され、乗杉嘉寿校長と配属陸軍大佐からこの話を直接聞いた。

私が師範科三年、学校生活最後の年だつた。翌十六年春から米、みそなどの食料、衣類いつさいが配給になろうとする寸前。大学、専門学校の卒業を三ヶ月も早めたのが十六年十二月だから、軍部が本気で大東亜戦争を拡大したときである。

後に日独伊三国同盟が結ばれ、国際連盟を脱退して世界を相手の第二次世界大戦に突入する。国内では日独伊以外の音楽の演奏を許さず、ドイツ、イタリアの音楽も、ユダヤ系作曲家の作品の演奏を禁止することになる。

私は校長と配属将校から、次のように話された。

「森脇君、こんなわけで、今年の学校教練査閲の結果が悪かつたら、東京音楽学校はつぶされてしまう。陸軍はそう決めてしまつている」

「音楽学校の学生は体力が弱く、兵隊として使えそろには見えない。そのうえ、軍事教練でみつともなければ、学校はつぶされてしまうのだ。君は兵役も終わつており、士官の適任証も持つてゐる。査閲の総指揮を頼める学生は君しかいない。引き受けて学校のため頑張つてくれ」

師範科には、短期現役兵を終わつた学生がいるが、それも全男子学生五十人ほどのうち十数人。それ以外は、カマキリやキリギリス

のようなバイオリンやピアノ弾きがほとんどである。

「私一人張り切つても浮き上ります、全学生によくよく説明してください」と念を押したうえで、無理難題を引き受けた。

当日は陸軍中将の査閲官に、なんとか宮様、それに少将、大佐と五、六人が腰に軍刀を着けてやって來た。

音校の校庭はテニスコート二面くらいの広さしかないので、表の東京美術学校、裏の寛永寺、上野公園の一部を走り回って、五十人ばかりの戦闘訓練を開催した。

私は短期現役兵最後の査閲で、夜行軍を終わって午前五時からの払暁（ふつきょう）戦を指揮し、最高のほめ言葉をもらつた経験があり自信はあつた。全女子学生、全教官の居並ぶ中で、中将の結果講評が始まった。

「本日の査閲においては、学生の意氣盛ん、特に適切なる戦闘指揮ぶりは東京都内専門学校の最高であつた」
校長と配属将校が泣き声で叫んだ。

「君は音校の命を救つた！」

私の野望

ある年齢に達すれば、将来への希望や野望を持つだろう。私の場合、一つは作曲をすることだった。

いくらジタバタしても、ピアノや声楽の専門家になれるとは考えてもいなかつた。それに更年期的年齢以降は演奏能力は、だんだん落ちていく。教師になるのだから、学生を指導できる程度の演奏の実力は持ちたいが、年齢的なハンディが少ない作曲をやろうと考え

たのだった。

東京音楽学校在学中から、自分の作品をいろいろ残したいと思ひ、学校での進度を超えてかなり勉強した。また卒業後、戦災でピアノや楽譜などすべてをなくし、自分のピアノを持てるまでに十年間もかかってしまったこともあって、演奏家ではなく、作曲の道に進むことになった。

今一つ、福岡に赴任する前に、広島師範の恩師、太田司朗先生に教育に関するお話を伺っているときに、ひそかに覚悟を決めたことがある。福岡県の小学校音楽のレベルを上げることである。それには、まずすべての教師が音楽に通じ、ピアノが弾け、歌える力をつけることだと決心して福岡に乗り込んでいた。

バイエル五曲の宿題をやつてこなかつた学生たちをひっぱたいたのは、その仕事始めだった。

たつた二組のひっぱたきで、学校中でオルガンの先取り合戦が始まつた。しかし、当時の男子師範（福岡師範学校）には、練習用のオルガンが八台、アップライトのピアノ二台しかなかつた。たつた十台では四百人の学生が練習できるはずがない。

さいわい全寮制だから、学生は夜も学校にいる。オルガンは遊びごとではなく、卒業すればみんな自分の学級を持って音楽を指導せねばならぬことを含む教師に説明して、夜間の練習を認めてもらつた。

それにしても足りない。先輩の音楽教師は教頭職なのに、どうして三十台くらいにする努力をしなかつたのかと不満であった。私が心を鬼にし、学生がやる気になつても、十台では弾ける力をつけよ